

# 人権

ゆかりの地をたずねてⅢ



京都人権啓発推進会議

# 人権

## ゆかりの地をたずねてⅢ

### もくじ

12	宇治橋	宇治市	26
11	在日大韓基督教京都南部教会	京都市南区	24
10	桜田儀兵衛顕彰碑	京都市下京区	22
9	北天の雄 阿弓流爲、母禮の碑	京都市東山区	20
8	祇園祭と犬神人	京都市東山区	18
7	二十六聖人殉教記念碑	京都市下京区	16
6	松尾と月読の古社	京都市西京区	14
5	六角堂	京都市中京区	12
4	慈照寺（銀閣寺）の庭園	京都市左京区	10
3	こひつじの苑	船井郡園部町	8
2	蚕糸業振興と工女教育	綾部市	6
1	第三海軍火薬廠朝来工場跡	舞鶴市	4
	案内マップ		2
	あとがき		28





# 案内マップ



- ① 第三海軍火薬廠朝来工場跡
- ② 蚕糸業振興と工女教育
- ③ こひつじの苑
- ④ 慈照寺（銀閣寺）の庭園
- ⑤ 六角堂
- ⑥ 松尾と月読の古社
- ⑦ 二十六聖人殉教記念碑
- ⑧ 祇園祭と犬神人
- ⑨ 北天の雄 阿豆流爲、母禮の碑
- ⑩ 桜田儀兵衛顕彰碑
- ⑪ 在日大韓基督教京都南部教会
- ⑫ 宇治橋











# 1 第二海軍火薬廠朝来工場跡

しょうあせく

舞鶴市

舞鶴市東の山間部にある舞鶴グリーンスポーツセンターと舞鶴工業高等専門学校周辺には、戦時中海軍がつくった火薬工場・火薬庫の跡がたくさん見られます。

戦前の舞鶴は日本の重要な軍港でした。日露戦争直前に設置された海軍鎮守府は、一九二〇・三〇年代には廃止されましたが、日中戦争さなかの一九三九年（昭和十四年）に海軍鎮守府が復活すると、舞鶴のいたるところで軍事施設の建設が急ピッチで進められました。それまで中舞鶴の長浜に置かれていた海軍火薬廠爆薬部は加佐郡朝来村（現在舞鶴市）に移転する計画が立てられ、土地の買収が行われると同時に、火薬工場などの建設工事が始まりました。

六〇〇万平方メートルにおよぶ火薬廠（一九四一年（昭和十六年）に海軍爆薬部が第三海軍火薬廠に改称）の用地整備や工場建設、山腹をくり貫いて火薬・弾薬の貯蔵庫をつくる工事などに多くの労働力が動員されました。日本人の徴用労働者もいましたが、埋め立て工事やトロッコ押しなどの重労働には主に朝鮮人が動員されました。「募集」という形で働きにきた人たちは、山あいのあちこちにつくられた飯場に住みこんで働きましたが、それ以外にも京阪神から徴用された人もいました。国鉄小浜線から火薬廠への引き込み線工事に従事していた朝鮮人の

飯場があったところは、当時「アリラン峠」と呼ばれ、朝来小学校では朝鮮人の子どもが児童の半数以上になったといえます。

一九四三年（昭和十八年）頃からは、朝鮮半島から直接「移入」された労働者も動員されました。いわゆる強制連行労働者です。舞鶴の海軍施設部には三八〇〇名の「移入労働者」がいたと記録されていますが、そのうちの一部が火薬廠の工事にも動員されたと思われます。「食事が少ないため一般労働者の飯場にご飯をもらいに来ていた」「朝鮮から連れてこられて日本語がわからないので現場監督からひどい扱いを受けていた」という証言があります。

こうして多くの朝鮮人を動員して建設された火薬廠では、日本の敗戦まで大量の爆弾が製造されました。戦後、「移入労働者」は朝鮮半島の故郷に帰り、その他の人々も京都や大阪に移りましたが、火薬廠の跡はそのまま残りました。現在グリーンスポーツセンターの野外炊事場や倉庫として利用されているコンクリート建物などは、火薬工場だったところです。また、舞鶴高专近くの谷に入ると火薬庫の跡も見られます。身近に残っている戦争の遺跡から、そこで働いていた人々のことを思い起こし、平和と人権について考える機会にしたいものです。

（水野直樹）



メモ●グリーンスポーツセンターへは、JR東舞鶴駅から京都交通バス「安岡経由朝来中」行きで「高専」下車、徒歩3分。又はJR「松尾寺」下車、下車徒歩20分。付近は、青葉山ろく公園として整備され、グリーンスポーツセンターのほか、パターゴルフ場、ちびっこゲレンデなどの施設があり、多くの市民に利用されています。

## 2

# 蚕糸業振興と工女教育

綾部市

京都府綾部市、綾の字は、かつて漢と書き漢氏渡来にかかわる歴史がこめられています。

JR綾部駅から十分、青野町のメインストリートに並ぶグンゼ博物館の繭蔵は、町のたたずまいに調和していて、リュックサックを背にした若い女性が見学に訪れていました。この地に本社をもつグンゼ株式会社は一八九六年（明治十九年）に創業され、百年を経た歩みは地場産業・蚕糸業振興の歳月でもあります。創業者波多野鶴吉は、当時の京都府何鹿郡内の製糸家・養蚕農家七四〇人の出資を得て会社を設立、その経営理念は何鹿郡の振興をはかるといって、地域主義に立脚していました。この契機となったのは前田正名・日本実業会会頭の存在で、彼は一八九五年（明治二十八年）綾部で講演します。「産業上において一国に一国の方針、即ち国是を定め、郡には郡是を定める。」地方産業を置きざりにした政府の大工業中心策への批判もこめられています。

原料繭は何鹿郡内の農家から、いわゆる「正量取引」という信頼関係をもとにした取引によって集め、女子工員は養蚕家の子女を採用、優良な糸を生産することをめざします。波多野鶴吉の経営を個人的なものとした背景には、キリスト教信仰があり、さらに二宮尊徳、孔子、シユルツエ、ライファイゼンの協同組合思想の影響が、ないまぜになっていたともいえます。

工女とよばれた女子工員の教育への配慮も行い一般教育と家庭科教育に力を注ぎました。創業当時、一八九六年（明治十九年）の郡是製糸女工の就業時間割によると六月後半は十三時間二分の実労働で一番長く、十二月後半は九時間十分で最も短く、年間平均では一日十一時間十八分の実労働。これを一九〇一年（明治三十四年）農商務省が行った「職事情」による他の会社と比較してみると、長野県の三会社はそれぞれ十三時間四分、十二時間三分、十四時間十分となっていて、グンゼは二〜三時間短いことが推計されます。

工女教育が本格的になるのはキリスト教信者の川合信水を招いた一九〇九年（明治四十二年）以降で、修身、国語、家事、生理、算術、習字、唱歌、裁縫などの科目を、毎月の休業日に半日ずつ、冬期夜間に教えました。川合信水の教育理念は徹底したもので、波多野の「善良な糸は善良な工女が作る」の考えに対して、「教育は一切の利害観念を離れ、従業員が一生幸福であるよう配慮して行くべきである。」としました。波多野鶴吉は、また川合の教えに終始謙虚であり、会社にとどまらず、村、町、郡といった地域社会にその精神が及ぶことを願っていたと、遺された講演録が語っています。

（福田雅子）





メモ●グンゼ博物苑は、JR綾部駅下車、北へ徒歩約10分。入場料大人300円（木曜日から日曜日開苑）。  
グンゼ記念館は、入場無料（金曜日のみ開館）。

### 3 いづじの苑

……船井郡園部町

わが国最初の身体障害者療護施設・こひつじの苑は、田園都市園部町のおだやかな自然に抱かれています。丹波路の風に誘われるように林道を縫っていくと、明るいさざめきが洩れてきて、車椅子のおふたりに出会いました。「寝たきり障害者に愛のホームを！」京都市の重度身体障害者グループが声をあげられたのが一九五八年（昭和三十三年）、それから十四年経った一九七二年（昭和四七年）五月十四日、この丘に、人が人として生きるはじめての家が築かれたのです。

玄関でボランティアの女性と語らっていたのは寺尾京子さん（六五歳）。苑の設立を願っていたおひとりです。寺尾さんは目の前に立つ<sup>ひのき</sup>桧を眺めるのが好き。十メートルもある樹を見上げて空を仰ぐ。「どこまで樹は伸びていくのだろう」ユーモラスな問いかけに、二五年間の苑のくらしがほの見えるようです。こひつじの苑の入苑者の定員は五十人。平均在所年数は男性が十年七ヶ月、女性は十六年十一ヶ月。その重い障害のため義務教育を受けることができなかった人は、半数以上にのぼります。食事、洗面、入浴、更衣、排泄、移動といった日常生活、機能回復訓練や文字を学び音楽を楽しむといった学習活動などで、徳川輝尚施設長をはじめ四十人のスタッフが援助にあたっ

ています。

食堂で話してくださいだった津田照子さん（六九歳）は、白髪を紫色に染めて貰ったお洒落な方。「私たちは置くところが無いです。」「病気であって病気でない」と発言されました。

入苑している人たちの多くは脳性小児麻痺、その多くは家中で寝たきりの状態で閉じ込められていたり、施設を転々としながら、家族もまた年老いていきました。

リュウマチ熱で手足が不自由な小村紀代子さん（六一歳）は、長い編み針を指にかけて食器を引き寄せることができます。かつては、「空襲でグラマンの襲撃を受けたとき、びわ湖の藻屑と消えていたらよかった」と思った。自ら死ぬことばかり考えていた日々でした。こひつじの苑で生活するようになって「空が見えた。風に流れる雲の動きも、木の葉の揺らぎも。胸張ってここで生きていけると。母の長生きを願う私の気持の中に、世話をして貰うという不純な甘えが消えたのが嬉しい」。

こひつじの苑の生活内容は、「人間の品位にふさわしい生活」を目標とし、「最も援助を必要とする最後の一人を大切に」人間尊重を基本理念としています。

（福田雅子）





メモ●「こひつじの苑」へは、国道9号線園部町河原町交差点を西へ、車で5分。

# 4

## 慈照寺（銀閣寺）の庭園

………京都市左京区

慈照寺は、足利八代將軍義政が造営した別荘である東山山荘を、義政死後、寺に改めたものです。この寺の東求堂と観音殿（銀閣）の間にひろがる庭園は、苔寺の名で知られた西芳寺の庭園を模したものといわれ、特別史蹟に指定されているのですが、その作庭の経過についてはよくわかっていません。

芸術的にすぐれた感覚をもっていた義政が、庭作りにおいてたいへん鼻肩ひじかにしたのは、善阿弥という庭者（河原者）でした。善阿弥は水を引いたり山を築いたり、また石の配りなどが得意で、彼が作った庭をみていると、時間のたつのを忘れるなどと当時の人びとに評価されていますが、義政はよほどの善阿弥が気に入っていたらしく、善阿弥が病気をしたときには、わざわざ使いの者に薬をもたせ、見舞いをしているほどののです。善阿弥は義政の依頼をうけて京都や大和など各地で作庭をおこなっています。

そうした関係にある二人ですから、義政の山荘の庭作りにも善阿弥が関与したことが当然考えられるわけです。義政が直接作庭を指導したともいわれていますが、しかし文献上では、誰がこの庭の設計図を作り、誰が作庭奉行となり、どのような人々が具体的な作業に従事したのか、個人名はほとんどでてこないのです。義政が山荘の造営に着手するのが、一四八二年

（文明十四年）二月のこと。ところが善阿弥は偶然にもこの年九月、九七歳という、当時としては稀有な長寿を全うしてこの世を去ってしまいます。したがって設計段階はともかく、具体的な作庭作業には善阿弥は関係しなかった、と考えるべきでしょう。

ならば慈照寺の庭作りに庭者とよばれた人たちが、まったく関与しなかったのでしょうか。善阿弥をはじめとする当時の庭者の活躍からして、関与しなかったと考える方がむしろおもしろい。彼らの作業への参加がなかったら、これだけの大工事は完成しなかったといってしまうでしょう。実際、この庭作りのために必要な庭木を求めて、たくさん庭者たちが幕府の命令をうけて各地に派遣されているのです。

また善阿弥には子の小四郎、孫の又四郎という、当代いずれも作庭家としてその名を知られた人がいました。あるいはこの二人が善阿弥の意を体して慈照寺の作庭に関与した可能性は、十分に考えられるところではないでしょうか。

なお、観音殿（銀閣）がその影を写す錦鏡池周辺は、室町時代の面影をよく残しているといわれていますが、砂の造形銀沙灘ぎんしゃなは、江戸時代になって作られたものです。

（川嶋將生）





メモ●京都市バス「銀閣寺」下車。拝観料大人500円。

# 5 六角堂

………京都市中京区

数年前、華道池坊の本部ビルが改築のために取り壊され、それまで裏に隠れていた六角堂が、青空をバックにその全容を顕わし、京童を驚かせました。京の真ん中に位置する六角形の偉容が、あらためてこの堂の歴史に思いを馳せさせたのです。

六角堂頂法寺は、四天王寺建立の材木を求めて京都盆地を訪ねた聖徳太子が、その持仏如意輪観音を本尊として創建したと伝えられています。しかも平安京造営の時には、道路建設の妨げとなるとわかると、一夜にして北に五尺移動したとも伝えられています。京都にとつては、主のような堂なのです。現在なお門内に残る古い柱の礎石を、「京のへそ石」と呼んで市民が親しむのも頷けます。この堂は清水寺・因幡薬師堂・革堂などとともに、平安時代から庶民の信仰を集めてきましたが、烏丸・六角という街の真ん中に位置していることもあり、市民生活と切り離せない関係で推移します。とくに町衆の勢力が台頭する中世後期には、下京町衆の町堂として、祇園会山鉾巡行の籤取り式はもちろん、下京町衆の寄り合い、非常時や時刻を告げる鐘など、みなこの堂の役目とされ、久世舞など庶民を対象とした勸進興行の場としても利用されました。

一方、観音に救済を求める信仰の場としても重要な役目を担

っていました。六角堂が洛中非人の救済の場であり、たまり場であったことは、死者供養の施行銭を配る場所として、獄舎・清水坂・雲居寺・融通堂などとともに六角堂が挙げられていることから知られます（『師守記』康永三年四月十四日条ほか）。

また飢饉における貧民救済も六角堂で行われており、一四六一年（寛正二年）に勸進聖願阿弥が流民のために六角堂前に建てた収容舎は、東洞院通から烏丸通まで数十間に及んだといい（碧山日録）、堂では毎日、粥の施行を行っています。

火災を何度も被ったこの堂は、江戸時代には六角形の姿ではありませんでしたが、もっぱら六角堂の名前で下京町衆の精神的紐帯として親しまれ、観音信仰の霊場であったことに変わりはありません。堂の付近には巡礼者相手の宿屋が建ち並び、彼らの施しを期待した者たちの集まる喧噪な場所でもありません。今日見る六角堂の堂舎は明治初年の建造であり、華道池坊としてのこれほどの繁栄も、近年のことではありませんが、垣間見せた束の間の偉容に、庶民救済を含めた長い歴史を思い起こさせる、京都ならではの堂舎です。（山路興造）





✕モ●京都市営地下鉄「烏丸御池」下車、徒歩3分。

## 6

## 松尾と月読の古社

つきよみ

京都市西京区

朝鮮半島南半部の東側に位置する新羅、その新羅を中心とする地域から渡来した人びとを主体に形づくられたのが秦氏です。この秦氏ゆかりの社寺は、京都にかなり存在します。その代表的な古社が、京都市西京区嵐山宮町に鎮座する松尾大社であり、同区松室山添町の月読神社です。

松尾大社は酒づくりの神としても有名ですが、この社の神は、七二年（和同五年）に太安萬侶が筆録したとその「序」に記す、『古事記』（上巻）にみえています。「大山咋神、亦の名は山末の大神」とあって、「亦葛野の松尾に坐して、鳴鏑をもつ神ぞ」とあるのがそれです。この古社の創建については、貴重な伝承が残っています。『秦氏本系帳』や『本朝文集』には、七〇一年（大宝元年）に秦都理が社を建てたことを記しています。そして『秦氏本系帳』が「日埼の峰より更に請ひたてまつる」と述べているのが注目されます。秦氏が社を建立する以前から松尾の神の信仰があったことを示唆しているからです。

松尾大社の裏山、松尾分土山大杉谷には、旧御鎮座場と伝えられている聖域があつて、そこには高さ約五メートル、幅約十五メートルの巨大な磐座があるのも重要です。松尾神社の古文書には、松尾の神のまつりに古くから秦氏がつながりをもって

いたことが物語られています。

松尾大社の境外攝社になつている月読神社もみのがすことのできない古社です。『続日本紀』の大宝元年四月の勅のなかにも、はっきりと葛野の月読神が登場します。この月読神の由来は古く、『日本書紀』の顕宗天皇二年二月の条には、阿閉臣事代が吉岐に立ち寄つたおりに、月神が託宣した説話が載っています。その神託にもとづいて歌荒櫟田を奉つたということです。この「歌」は葛野の「宇太」で、「あらす」は「ある」という動詞の他動詞です。つまり葛野の宇太の田を奉献したことを伝えていきます。

『山城国風土記』の逸文には、月読神が保食神のもとへおもむく伝承が語られています。そのさいに聖なる桂の樹によりついたとあって、京都の桂という地名のおこりはそこから始まるというわけです。松尾大社や梅宮神社の古文書には月読祝（月読社の神職）として秦氏が名を連ねています。月読神社の神像の墨書には、その後補の時期を一七四一年（寛保元年）とし、秦種愷と明記してありました。このように京都の古社が、朝鮮半島からの渡来集団と密接なつながりをもっていたことがわかります。

（上田正昭）





メモ●阪急電鉄「松尾」下車。月読社は、松尾大社から南へ約400m。

十六世紀の後半、日本でキリスト教―キリシタンの信仰が爆発

的といっているほど急速にひろまりました。その主な地方は九州でしたが、政治・経済・文化の中心であった京都は宣教師たちもつとも力を注いだ布教地域でした。一五五一年（天文十八年）に京都へやってきたイエズス会派の宣教師フランシスコ・ザビエルがそのはじめで、ザビエルの場合、京都での開教に成功しませんでした。その八年後に入洛したガスパル・ヴィレラやそのあとをついだルイス・フロイスなどのポルトガル人宣教師の活動によって京都の信徒は増えはじめました。一五七六年（天正四年）には信長の許可を得て蝟薬師通りの室町と新町の間には三階建ての新しい礼拝堂兼宣教師の住居が完成しました。「南蛮寺」とよばれたこの会堂の状況は神戸市立博物館に現存する扇面図でその様子をうかがうことができます。

秀吉は信長の方針をうけついで、当初はキリスト教の布教を認めていました。しかし一五八七年（天正十五年）に博多で突然、宣教師の日本からの退去命令を出し、各地の教会を破却させました。京都の南蛮寺もこのときに消滅させられましたが、このころ京都にはかなりの信徒がいて、その後も布教を続けていました。

一五九六年（慶長元年）十一月、秀吉は日本人の信徒たちに

対する迫害を命じました。

京都では石田三成らが町中の布教所などを襲い、信徒の名簿の作成にとりかかりました。そして六人のイスパニヤ人宣教師のほか、日本人の説教師など十六人（または十八名）を逮捕・投獄しました。そのときの情景を醍醐三寶院の座主「義演准后日記」は次のようにのべています。

「伝聞、ダイウス党御成敗廿七人、雑車二ノセテ鼻ヲソキテ、洛中被渡云、「其後伏見・小（大）坂以下へ被遣云々。」また公卿の山科言繼「言繼卿記」では「大ウス御成敗、上京、下京車二テ被相渡也云々（中略）左右耳ヲソカルル云々。（肥前）車七両有之云々。次大坂・堺ヲ被渡了、西国ヲ被渡、ナコヤニテ八付二被懸也云々」（いずれも慶長元年十一月十五日条）

京都および大阪のキリシタン信徒のほか更に途中で二名の信徒が加えられ、二十六名が長崎西坂の丘で処刑されたのは一五九六年（慶長元年）十二月十九日のことでした。

今、元妙満寺跡（下京区岩上通り綾小路角）の教会には「二一六聖人」の殉教を記念する石碑が建立され、近くにはその事跡を記す銘板が建てられています。

（仲尾宏）





メモ●京都市バス「四条堀川」下車。石碑は岩上通綾小路角に、銘板は「京都四条病院」救急入口横の壁にあります。写真は「二十六聖人発祥の地」碑近くにある説明板とキリシタン灯籠ともよばれる織部灯籠。

## 8

祇園祭と犬神人いぬじん

………京都市東山区

京都の夏を彩る祇園祭、そのなかでもとりわけ華やかなのは七月十七日の山鉾巡行でしょう。その山鉾巡行の影に隠れてあまり目立ちませんが、祇園祭でも他の祭礼と同じように、神輿みこしが御旅所に渡御する、いわゆる神遷の神事が行われます。現在は三基の神輿は、山鉾巡行と同じ七月十七日に四条御旅所に渡御し、二四日に神社に還御することになっています。

この祇園祭の神輿渡御は、山鉾巡行とともに祇園祭を代表する神事として、古くよりさまざまな絵画に描かれてきました。とくに三基の神輿が、四条河原に架けられた仮橋を渡る場面は、祭りの一つのクライマックスでもあり、繰り返し画題として取り上げられています。

室町時代の末にできた上杉家本「洛中洛外図」も、神輿が仮橋を渡る有様を描いています。目を凝らして見ると、行列の先頭に少し変わった格好の人たちがいることに気が付きます。甲冑かぶとかとも思われる装束を身につけ、頭には白い布を巻き、手には棒をもった六人です。

彼らは、神輿の先駆けを勤めていた犬神人いぬかみじん（弦百つるもも）たちです。犬神人とは祇園社に属した非人のことで、中世、清水坂に住んでいたことから坂者さかものとも呼ばれていた人々です。犬神人の名の

由来は明らかではありませんが、祇園社（現在の八坂神社）に奉仕する時は、同社所属の神人として、こう呼ばれるのがつねでした。

非人（坂者）たちが清水坂に住みついたのは、もともとは隣接する烏辺野の地が葬送地であったことによります。さまざまな穢けがれを清めること（清目きよめ）を職掌の一つとしていた彼らは、死者の管理者としてこの地に住みつき、中世には葬送・埋葬に関わる特権をもつに至っていたのでした。

六人の犬神人も、祇園の神輿の先駆けとして、神輿の行く手を清める役割を果たしていたのでしょう。華やかな祇園祭、そこに清目という役割をもって参加していた非人の姿があったことを見落としてはなりません。

（下坂守）





メモ●坂者の集落は江戸時代に坂弓矢町と名前を変え、住人は<sup>ゆみづる</sup>弓弦や<sup>えぼし</sup>烏帽子などの製造にあたっていましたが、明治に入ると彼らは相次いで町を離れていきました。しかし、甲冑などは弓矢町の町内会に引き継がれ、祇園祭の期間中は町内の商店の軒先に飾られます。弓矢町へは、京都市バス「川端松原」下車、東へ徒歩2分。

## 9

## 北天の雄 阿弓流爲・母禮の碑……………京都市東山区

京都の清水寺境内の南苑に、北天の雄と称されている阿弓流爲と母禮の顕彰碑が建立されています。阿弓流爲は律令国家の中華・夷狄いてき観にもとづいて「蝦夷えみし」とよばれた人びとの盟主で、桓武朝廷の征討軍に対して勇猛果敢に反撃した英傑でした。母禮はその副将です。

一九九四年(平成六年)は建都千二百年の節目ふしめの歳でしたが、その十一月六日に、この顕彰碑が、清水寺の協力のもと関西胆江同郷会・アテルイを顕彰する会・関西右手県人会・京都岩手県人会の皆さんによって建立され、おごそかに除幕の法要がいとなまれました。坂上田村麻呂さかのうえのむらまろの開基と伝える京都の清水寺、その境内に阿弓流爲・母禮の碑が建てられたそのいわれには、深い意味があります。

八〇五年(延暦二四年)の十二月、「天下の徳政」が朝廷で論議されたおりに、参議藤原緒継おつぐは「方今天下ほつてん苦しむ所は軍事(蝦夷征討)と造作(都づくり)」と述べましたが、「征夷せいゐ」は当時の政府の大きな課題のひとつでした。七八八年(延暦七年)の七月、「征夷大使」に任じられた紀古佐美きのこさみは、翌年の三月、多賀城を拠点に大軍を率いて侵略を開始しました。これを迎えて闘ったのが、盟主阿弓流爲が統率する軍勢でした。同年の五

月、阿弓流爲の智謀によって政府軍は大敗します。『続日本紀』によれば、阿弓流爲の軍の死者は八九名、政府軍の死者は千有余人、傷者は二千名たらずと記されています。

七九一年(延暦十年)の七月、大伴弟麻呂おのとものおとまろが「征夷大使」となり坂上田村麻呂らが副使となつて征討におもむきましたが、阿弓流爲らの抵抗を鎮圧することはできませんでした。七九七年(延暦十六年)の十一月、田村麻呂が「征夷大將軍」に任命されます。そして陸奥・出羽の按察使・陸奥守・鎮守將軍を兼ねた坂上田村麻呂は、八〇一年(延暦二十年)の二月に「節刀」を与えられて鎮定にとりくみました。「出ずる毎ごとに功あり、寛容たかを待し」た、その「將帥しょうすいの量」は、現地の人びとも浸透しました(『日本後紀』)。延暦二一年の四月、ついに阿弓流爲・母禮ら五百余人が帰属します。田村麻呂は阿弓流爲・母禮の武勇と器量が高く評価して、戦後の東北経営に登用することを進言しましたが、公家たちの反対によって河内国で斬殺されました。

一九九三年(平成五年)のNHK大河ドラマ「炎立つ」ほむらで、里見浩太朗さんが演じられた阿弓流爲を想起します。この碑は阿弓流爲と母禮そして坂上田村麻呂の鎮魂碑です。(上田正昭)





✕モ●清水寺へは、京都市バス「清水道」下車、東南へ徒歩5分。

10

## 桜田儀兵衛顕彰碑

………京都市下京区

江戸時代の被差別部落は、あまり多くはないものの農地もあり、皮革業も江戸後期には雪駄せったの生産がのびて、その結果部落の人口が数倍にも増えたほどの隆盛をみせていました。

その状況が一変するのは、一八八一年（明治十四年）に大蔵卿に就任した松方正義の緊縮財政政策により、一八八三年（明治十六年）から深刻となった不況のなかで雪駄を中心とした皮革業が打撃をうけ、生産量が従来の十分の一に減少したためでした。有力な産業を失った部落に、江戸末期に皮革業の好況で増加した人口が重くのしかかりました。

紀伊郡柳原町は江戸時代には皮革業・履物業で栄えた村でしたが、この不況の影響を『町史』は「同（明治）十三・四年頃より衰微の兆を顕し、十七・八年に至り甚敷惨状を見る」と記しています。

桜田儀兵衛は一八三二年（天保三年）に柳原町の前身である六条村に生まれましたが、一八七三年（明治六年）に推されて戸長（旧の庄屋・年寄にかわる職）に就任していらい、戸長・町長を歴任して町政につくすと同時に、衰退していく村のために私財を投げうってつくした人でした。

一八七七年（明治十年）に貧民救助により京都府から表彰さ

れたときの記録によれば、極難<sup>ごくなんじゅうしゃ</sup>洗者へは衣服帯・金を与えたといいます。また、一八七九年（明治十二年）の火事で二十人近くが焼け出された時には、村内から寄付を募り自らも百円を出してこれを助けました。

また、この頃はコレラ・チフスなど外来の伝染病が猛威をふるいましたが、被差別部落はその感染源と思いついて入っている人も少なからずいました。桜田儀兵衛はこれらの差別的な風評を消そうと村内の衛生維持につとめ、一八八六年（明治十九年）京都府下にコレラの大流行をみたときには、わずか数名の患者を出したに留まり、そのことがわざわざ新聞に報道されるほどでした。

一八九三年（明治二六年）三月、桜田儀兵衛は病を得て町長の職を辞し、同じ年の十一月七日に亡くなりましたが、これを追慕する町の人々は翌年十一月に顕彰碑を建立しました。碑文を撰したのは紀伊郡長の荒木公木、年来の儀兵衛の友人でした。  
（山本尚友）





✕モ●京都市バス「河原町塩小路」下車。石碑は、河原町通塩小路下るにあります。



# 在日大韓基督教京都南部教会

きりすときょう

……京都市南区

京都市南区の東九条に、一九九五年（平成七年）に新築された南部教会があります。多くの在日韓国・朝鮮人が生活する東九条に建てられたこの教会は、信仰の場であると同時に、憩いの場、そして生活・文化のよりどころの一つともなっています。

戦前、朝鮮語の讚美歌を歌い、説教も朝鮮語で行われる朝鮮人のキリスト教会は、日本当局から警戒の目を向けられ、民族の救済・解放を希求する朝鮮人キリスト者は、特高警察の監視を受けていました。それを象徴する弾圧事件が、一九四一年（昭和十六年）南部教会で起こりました。牧師や信徒らが治安維持法違反で検挙され、民族的な信仰の場を奪われるという受難を経験したのです。

一九二〇年代、京都に渡来・居住する朝鮮人が増えていきました。その中のキリスト教徒らは日本の教会を借りて礼拝をしたり、家庭で集会を開いたりして、異郷の地で信仰を深めていました。一九二八年（昭和三年）から一九二九年（昭和四年）にかけて、壬生に朝鮮耶蘇教京都西部教会、東九条に九条教会が設立されました。その後、西院に新しい礼拝堂が建築され、在日朝鮮基督教京都中央教会となりましたが、警察の弾圧のため礼拝堂は五年間も使用できなかつたうえ、許可されたときには礼拝用語を日本語とするよう強要されるという状態でした。

東九条上殿町の民家を借りて運営されていた南部教会では、礼拝堂建設が計画されていましたが、一九四一年（昭和十六年）七月、牧師の黄善伊、長老の金在述ら七名が検挙され、うち五名が治安維持法違反として送検されました。理由は、前年に赴任してきた黄牧師が、「朝鮮が日本に隷属する限り、朝鮮民族は滅亡のほかない。朝鮮キリスト教徒は、福音伝道に際して朝鮮同胞の民族意識を高め、民族伝統の文化を維持し、民族性を保持して団結を図り、朝鮮の独立のために献身すべき使命をもっている」と主張して、信徒らとともに聖書研究会などを組織したというものでした。しかし、教会での説教で朝鮮民族の復活・救済を唱えたとしても、それを「独立のための組織的運動」（治安維持法違反）とすることには無理があったからでしょう。黄牧師、金長老らは起訴猶予処分で釈放されることになりました。

しかし、当局は朝鮮人のよりどころとなっている教会の存続を許さず、黄牧師を日本から追放したうえ、南部教会やいくつかの伝道所を解散させました。戦時体制の下での「朝鮮人の指導教化」や戦争動員を進めるには民族的な信仰が邪魔だったからです。

戦後、再び東九条に伝道所が設置されましたが、礼拝堂が建設されたのは弾圧事件から三五年後の一九七六年（昭和五六年）のことでした。

（水野直樹）





メモ●教会は、九条河原町を東へ行った鴨川沿いにあります。

川は、水や魚介といった恵みを与えてくれると同時に、洪水によって多くの被害をもたらす恐ろしい自然でもあります。それゆえ人々は、川は人の力の及ばない畏怖すべきものであり、神が宿ると考えてきました。

また、川を渡るということは、未知の世界、すなわち異界に立ち入ることであり、橋は異界へ通じる通路でもありました。それゆえ、川に橋を架けるという行為は、僧侶のような世俗をこえた人たちに委ねることによって可能であったといえます。橋以前の渡しについても、渡しは川という聖域に関わる行為であり、渡守も俗を超えた性格をもっていると考えられていました。とはいえ、川によって遮られた交通路を繋ぎ、人々の往来を容易にし、大量の物資輸送をすこぶる利便にするものとして、架橋はきわめて重要な事業となり、主要な交通路上の橋は国家の管理のもとに置かれることになりました。

宇治橋がはじめて宇治川に架けられたのは七世紀のころです。宇治は大和から近江を経て東国へ向かう主要ルート上であり、宇治川の渡河点としての宇治橋は、軍事的にもきわめて重要な位置を占めていました。

宇治橋は、六四六年（大化二年）、奈良・元興寺の僧道登に

よって架けられたと「宇治橋断碑」には記されています。しかし、『続日本紀』には法相宗法興寺の僧道昭が建立したと記されています。どちらが正しい史実を語っているかについてはひとまずおくとしても、道登は社会事業に尽力し、道昭は、「後二於テ、天下二周遊シテ、路傍二井を穿テ、諸ノ津済ノ処二船ヲ儲ケ橋ヲ造ル」（『続日本紀』文武天皇四年三月己未条）とあるように、諸国をめぐって、井戸を掘り、渡しを設けるなど精力的に土木事業をおこなった人物としてよく知られています。ともかく、宇治橋架橋に関わる両人は、ともに社会福祉事業に積極的に関わっています。

宇治橋から上流を眺めると、中州の塔の島に浮島十三重塔が見えます。非人救済事業に精力的に取り組んだ西大寺の僧叡尊が、一二八六年（弘安九年）に、宇治川での殺生禁断と宇治橋供養のために建立したものです。叡尊が宇治川での網代停止とひき替えに、彼の唯一の土木事業である宇治橋の架橋をおこないましたが、塔はその記念碑ともいえるべきものです。川の中州という場所柄、幾度となく倒壊の憂き目にあっていますが、そのつど復興されて今日におよんでいます。（源城政好）





メモ●宇治橋へは京阪電車「京阪宇治」駅下車すぐ。1996年（平成8年）、橋は新しいものに生まれ変わりました。

## あとがき

「人権ゆかりの地をたずねて」も第3集を数えることになりました。

今日、人権尊重は平和と社会の発展の基礎であるということが、世界の共通認識になりつつあります。しかし、まだまだ様々な人権問題が存在しており、その解決のためには、人権への自覚と人権確立のための行動が求められているのではないのでしょうか。

京都人権啓発推進会議では、府民の皆様に関心を持って京都に残る人権の歴史等に接していただき、「人権」を身近で大切なものとしていただくために、この冊子を企画・提供してまいりました。

(財)世界人権問題研究センター及び執筆の先生方の御協力により、これまで24の事例を御紹介してきましたが、幸いにも多くの人達から御好評をいただいております。

この冊子が、人権を考える上で、府民の皆様のお役に立てますことを心から願っています。

平成9年11月 京都人権啓発推進会議

この冊子をつくるに当たり、関係の方々に文献、資料の提供や写真撮影などについて、数々の御配慮をいただきました。厚くお礼申し上げます。

<執筆者> (掲載順)

水野 直樹	京都大学人文科学研究所助教授・研究センター客員研究員
福田 雅子	NHK解説委員・研究センター研究第4部長
川嶋 将生	立命館大学文学部教授・研究センター客員研究員
山路 興造	京都市文化市民局文化財保護課参与・研究センター嘱託研究員
上田 正昭	京都大学名誉教授・研究センター理事長
仲尾 宏	京都芸術短期大学教授・研究センター研究第3部長
下坂 守	京都国立博物館京都文化資料研究センター資料管理研究室長・ 研究センター嘱託研究員
山本 尚友	研究センター専任研究員
源城 政好	宇治市歴史資料館館長・研究センター嘱託研究員

制作協力 世界人権問題研究センター  
写真・曹智鉉 イラスト 河村立司



鉢 はち

叩 たたき

——死者をなぐさめた人びと——

鉢叩は、空也上人流の念仏を唱えたりしながら門付し、十二月には寒修業としてあの世の供養のため烏辺野（現在の京都市東山区）の墓所巡りをした人びとですが、中世には非人の仲間に加えられて、差別されていました。

室町時代後半に制作された『七十一番職人歌合』の四十九番に登場し、そこには

無常声 人聞けとてぞ瓢箪の

しばくめぐる 月の夜念仏

との和歌が記されています。これは彼らが瓢箪を叩きながら葬地などの無常所を歩く姿を読んだものです。

また同歌合には、今一つ

恨めしや たが鹿角ぞ昨日まで

こうやくと いひてとはぬは

の和歌が載っています。「恨めしいことだよ、昨日まで来るよ来るよ（こうやく＝空也）」といいながら来ないとは」と、鉢叩が関係する空也上人の姿をもじって歌っています。

このように鉢叩の人びとのすがたを当時の人たちは親しみぶかくみつめていたのでした。

（川嶋將生）



## 人権 ゆかりの地をたずねて

---

1997年11月発行

発行 京都人権啓発推進会議

事務局 京都府同和・人権啓発室

〒602-8570

京都市上京区下立売新町西入藪ノ内町

電話 075-414-4271

制作協力 財団法人 世界人権問題研究センター

電話 075-231-2600